

審査の結果の要旨

氏名 浅井幸子

本研究は、1920年代の児童の村（小学校3校）を中心とする教師たちの教室の記録における一人称の語りの成立とその変容過程を分析し、教師である「私」と固有名の子どもによって教室の風景を叙述する実践記録の様式の成立を歴史的に探究することを主題としている。この主題に接近するために、本研究は、教師たちの日誌や手記や手紙を渉猟し、それらの記述において可視化される教師としての自我の亀裂や葛藤、子どもへのまなざしと関わり、教室の出来事に対する意味づけなどの教師の経験世界を叙述し、その変容過程を新教育の高揚と衰退の歴史的な脈に即して考察している。

本論文は3部8章によって構成されている。第一部は池袋児童の村小学校の野村芳兵衛（第1章、第2章）と小林かねよ（第3章）における一人称の語りの成立と固有名の子どもの発見が考察されている。同校に集った教師たちがいずれも自我の模索に逡巡した事実が提示され、子どもとの「友情」にもとづく「交友」（野村）あるいは「子供と共に生活する」関わり（小林）によってカリキュラムを創造した実践の意義が考察されている。

第2部は芦屋児童の村小学校の桜井祐男（第4章）雲雀ヶ岡学園の上田庄三郎（第5章）池袋児童の村小学校の峰地光重（第6章）における教育ユートピアの構想が探究されている。抑圧と圧迫を排除した無権力の空間である「慰安所」としての学校を構想した桜井、子どもが大人を教育する「コドモ運動」と個性が礼賛される「素人の教育」を構想した上田、自然の事物との関わりに子どもの「生命」の発露を求めて「田園学校」を構想した峰地は、それぞれヴィジョンを異にしているが、教師としての「私」の解放を教育ユートピアと結合した点で共通した特徴を有している。

第3部は女性教師のジェンダーの葛藤が検討の対象とされ、池袋児童の村小学校に勤務し後に子供の村を開設した平田のぶ（第7章）と芦屋児童の村小学校の桜井と共に文芸雑誌の同人として活躍した奈良女子高等師範学校附属小学校の池田小菊（第8章）の教育愛をめぐる自我の葛藤が叙述され、女性と教師、養育と教育、家庭と学校の狭間を生きた女性教師の葛藤とそこから開かれる教育の可能性について考察している。他者の子どもを母性によって愛することを追求した平田において繰り返された愛の挫折は、母子関係に帰着する女性教師の愛の屈曲を示し、女性性を肯定し「教室の家庭化」による自然な愛着関係を希求した池田の教育実践は教室を親密圏として再構成する可能性を示唆している。

本研究は、児童の村の教師たちの自我意識や感性や信念の葛藤をアクチュアルに描き出すことにより、教師である「私」の内省と顔と声をもつ固有名の子どもとの関わりを物語の様式で記述する実践記録の成立を歴史的に意義づけることに成功している。教師の自我意識の精緻な分析によって新教育の歴史研究に新たな切り口を提示した本研究は斬新であり、日本の教師文化の特徴的な伝統とされる実践記録の様式の成立を歴史的に解明した功績は大きい。よって、本論文は博士の学位の水準を満たすものとして評価された。